

近世における複合動詞のアクセント

上野和昭

一

いわゆる複合動詞（動詞＋動詞）が、古代語においては単なる二語の連接にすぎず、人々もこれを二語と意識していたであろうことは、吉澤典男氏・金田一春彦氏・桜井茂治氏らによって論ぜられてきたところである。⁽¹⁾しかし一方では文法・語彙研究の立場

からの疑問や反論が、大野晋氏・関一雄氏らによって提出されているし、⁽²⁾また小松英雄氏は、語調の調整などの外形は「意味の癒着」に後れるものであることを確認され、⁽³⁾『類聚名義抄』の語調標示に複合動詞への過渡的段階を反映したものがあつたことを指摘された。⁽⁴⁾さらに山口佳紀氏は、上代文献にみられる複合動詞の連濁の例とともに、『図書寮本類聚名義抄』で「飽き足る」に差された声点が一語のアクセントを反映していることを紹介され、「これから見ると、複合動詞が二語として意識されていたとは、必ずしも言えないことになる」と述べておられる。⁽⁵⁾

以上が、古代語において複合動詞が二語であつたか否かについての、主としてアクセントの面からの研究経緯の概略であるが、この時代のアクセント資料から判断するかぎり、少数の例外は確かにありはするものの、その多くの例について複合が完全に進んでいたとは到底考えられないように思われる。

ところで、本稿では近世における複合動詞のアクセントを取り上げるのであるが、これは一語に複合したとされる近代語において、そのアクセントがどのような明らかなし、さらにその結果から古代語の問題をもう一度考えてみようとする試みである。金田一氏は「複合動詞が現在のように一語として扱われるようになったのは江戸時代以後のこと」と述べられたが、⁽⁶⁾そうであるならば、ここに取り上げようとする近世のアクセント資料、具体的には主として江戸時代の京都アクセントを反映するとされる平曲譜本において、体系変化後のアクセントによって複合した新しい複合動詞のアクセントが見られるはずである。そしてまた、

もし体系変化以前の古代語において、すでに複合していた語があったとすれば、それらと新しい複合動詞との間になんらかの差異が見られるかもしれない。その結果によっては、古代語の複合動詞の実態に言及できるのではないか。そのような期待がもたれるのである。

資料とする平曲譜本は、東京大学国語研究室蔵『平家正節』(文献番号13/119)B 以下『東大本』と略称)であるが、このうちの『口説』『白声』の二曲節を中心にして、一部『指声』も援用したい。『白声』は『平家正節』の成立した安永頃の、『口説』はそれを遡ること遠からぬ頃の、また『指声』についてはさらに古く室町時代頃の京都アクセントを反映しているとされている。

複合動詞を扱う場合には、意味の面から吟味して、その複合の段階によって分類したりする方法も考えられよう。しかし、本稿では平曲の譜記から判断して、明らかに二語のアクセントを反映すると思われるものを除き、そのほかの例を集めて考察する。二語のアクセントとは、一連の複合動詞のうちに二箇所高い部分をもつもので、たとえば次の如きがそれである。

いひ置カばや(上×上上××) 15 内女三六3白声
走り出ける中カに(上×××上上××)――)

9 上文流 四2口説
紛ギれ入りたりけん(上××上×××××)

7 上法遷一15白声

これらに、高い部分が一箇所になるように調整されたアクセシ

トを反映する譜記が施されている場合もある。次がその例で、本稿では、この類を検討対象にする。

云い置て(上×××××) 10 下篠原 八2口説
はしり出て(上×××××) 15 内女二九1口説
まきれ入って(上×××××) 5 下二魁 四1口説

また連用形の拍数が二拍の動詞を中心に、①(二拍十二拍) ②(二拍十三拍) ③(三拍十二拍)の三つの場合を考察するが、実際にあらわれる例のほとんどが連用形であるので、ここでの考察も主として連用形のアクセントを対象とすることを、はじめにお断りしておく。なお、他の活用形から連用形のアクセントを推定することは、最小限確実な場合のみにした。

二

①(二拍十二拍)の場合、今それを一語とみるか否かはともかくとして、その連用形(後項の動詞が連用形)の譜記から考えられるアクセントは三種類である。すなわちA●○○○、B○○●●○○○○○、C○○●○○○(●は高拍、○は低拍をあらわす)がそれである。次にそれぞれに属す語を掲げる。

A●○○○

a 荒れ行き 言ひ入れ 言ひ置き 入れ替へ 押し開け 押し上げ 押し当て 押し張り 押し寄せ 追ひ上げ 追ひ入れ 消え入り 消え失せ 消え遣り 聞き知り 汲み入れ 捨て置き 据え置き 突き当て 突き入り 飛び越え 飛び

去り 飛び乗り 乗り替へ 乗り越え 乗り連れ 引き開け
引き上げ 引き入れ 引き替へ 引ッ据ゑ 引ッ張り 踏み
抜き 振り上げ 焼き上げ 遣り入れ

(36語)

b 言ひ合ひ 言ひ掛け 言ひ付け 押し掛け 押し籠め 押し付け 押し成り 押し分け 追ッ掛け 追ッ籠め 追ッ立て 追ッ付き 聞き付け 聞き成し 聞き馴れ 聞き分き 捨て果て 据ゑ兼ね 突い立ち 突き出で 泣き飽き 泣き合ひ 抜き持ち 引き具し 引き立て 引き付け 引き詰め 引ッ掛け 引ッ組み 引ッ裂き 引ッ提げ 引ッ立て 行き会ひ 呼び取り 寄り合ひ 寄り付き

(36語)

Aの類は、前項の動詞が高起式のものである。今かりに後項の動詞の高起・低起の式によってa「●○+●○」とb「●○+○●(○●)」とに分けたが、その連接した全体のアクセントはなら変わらない。前項のアクセントを生かし、後項は低く平らに付いて、●○○○となる。もっともaの「引ッ据ゑ 引ッ張り」bの「追ッ掛け 追ッ籠め 追ッ立て 追ッ付き 引ッ掛け 引ッ組み 引ッ裂き 引ッ提げ 引ッ立て」には、●●○○とみられる譜記が付いているが、これは第二拍が促音のための変容と考えられる。

B (1) ○●●●○ (2) ○○○○

相ひ知り (1/2) 相ひ添ひ (1/2) 相ひ続き (1/2)

出で入り (1/2) 打ち明け (1/2) 打ち上げ (2/2) 打

ち入り (2/2) 打ち入れ (12/2) 打ち着せ (1/2)

打ち越え (1/2) 打ち添ひ (2/2) 打ち乗せ (1/2)

打ち乗り (2/2) 打ち振り (2/2) 打ち負け (1/2)

打ち寄り (2/2) 落ち入り (1/2) 落ち失せ (2/2)

落ち行き (12/2) 書き置き (2/2) 掻き暗れ (1/2)

掻き載せ (2/2) 掻き寄せ (1/2) 駆け入り (12/2)

漕ぎ寄せ (1/2) 差し上げ (1/2) 差し入り (2/2)

差し置き (1/2) 差し添へ (2/2) 攻め入り (2/2)

絶え入り (1/2) 立ち入り (1/2) 立ち聞き (2/2)

立ち囲ひ (2/2) 立ち添ひ (1/2) 立ち寄り (12/2) 取

り上げ (2/2) 取り入れ (2/2) 取り添へ (1/2) 取り

乗り (2/2) 取り寄せ (2/2) 投げ上げ (1/2) 投げ

入れ (2/2) 投げ捨て (1/2) 逃げ入り (2/2) 逃げ去

り (1/2) 脱ぎ捨て (1/2) 馳せ入り (2/2) 馳せ散

り (2/2) 馳せ寄せ (1/2) 跳ね入り (2/2) 更け行

き (1/2) 干し上げ (2/2) 見え初め 召し置き (2/2)

召し寄せ (1/2) 漏れ聞き (2/2) 彫り入れ (2/2)

(58語)

Bの類は、前項の動詞が低起式で、後項が高起式のものである。これらは、平曲ではまず間違いない(1)○○●●○または(2)○○●●○のかたちで連接する。右の語群で()内の数字は、/の上が『口説』に、下が『白声』にみられるアクセントを

飽き満ち 相ひ具し 相ひ待ち 出で立ち 受け取り 打

ところで、右にあげたもののほかに、いくつか問題のあるもの

もある。まず「昇き据ゑ」にCのアクセントを、また「もて酔ひ」にBのアクセントを反映する譜記が付けられているのは、それぞれを構成する動詞のアクセントからして不都合である。しかしこれらは、『尾崎本』『京大本』『演博本（左譜）』のとき同じ「正節」譜を伝える異本では、「昇き据ゑ」にB、「もて酔ひ」にCと判断できる譜記が付いており、『東大本』の誤記かと疑われる。

つぎに「住み馴れ」にB、「打ち連れ・打ち笑み」の両語にCを思わせる譜記があるのは、「正節」譜の諸本みなこのとおりで誤記の可能性は少ない。「馴る」は低起式、「連る」と「笑む」は高起式であるから、逆になってほしいところであるが、このまま疑問としておかざるをえないのは残念である。⁽¹¹⁾

また左の例も規則に合わない。

打テ堪へ申す事をば(×上上×——) 15下文沙 三1口説

「堪(耐)ふ」は低起式であるから、Cのアクセントが期待されるが(「打ち絶え」と解釈しても同様)、実際はB(1)となる。諸本また同様で、俄かに誤記とも考えがたい。「訴へ(●●○)」と解釈して、そのアクセントが影響したのかもしれない。さて、ABC三種類のアクセント以外のものが、少数ながらある事にも注意しなければならない。

飽足ラで(上上上上××) 6上殿下 二4口説
討ッメとり、(上上×××) 4上信連三九1口説
討ッ取ッて(上上××××) 6上五節一〇2素声

打ッ立チけり(上上×××××) 13下法住 四1口説
打ッ立ッて(上上×××××) 5上小松一三1素声

(上上×××××) 炎上奈良一七5口説

打ッ立テたらば(上上××××××) 読物願書 二3口説
踏ッ張、(上上×××) 3下字治一八2口説

「飽き足り」は引用例の「足」の右肩に濁点があり、複合の進んでいることは平曲譜本からも知られ、山口氏の指摘のように古くから複合していた模様である。とすれば、古く低起式の一語の動詞は終止形○○●○型であるから、近世は、この終止・連体形○○●○から変化した●●○○○⁽¹²⁾になっていたはずで、その未然形のアクセントが平曲の譜記にあらわれたのだと考えたい。もし近世において複合したのであれば、Bのかたちには一度は収まりそうなものだが、そのような形跡はない。「討ッ取り・打ッ立ち・打ッ立て」も、近世に複合したのであればCとなるべきで、やはりこれも古く○○●○型であったのではないかと思う。「踏ッ張り」(引用例「張」右肩に濁点)は、前項後項ともに高起式であるから、A●●○○○となるべきで、●●●○○を反映した譜記のあるのは第二拍の音便のためかとも考えられるが、撥音はこのような場合の促音のように前拍のアクセントの高さを保つことはない。⁽¹³⁾してみると、これも古く複合していたものかということになるが、それならば、この場合は●●●○○型が続いてきていたはずで、●●○○○というのは今一つ符合しない。しかし平曲譜本にみえる四拍動詞のアクセントを調べると、古く高起式であっても、連用形

が●●○○であるものもあり（「欺く」「重なる」「連なる」「貫く」など）、この推定を必ずしも妨げない。

三

②（二拍十三拍）の連接の場合は、次の四種類のアクセントがあらわれる。すなわちD●○○○○、E●●●○○○○、F●●○○○○○○○○、G●●○○○○がそれである。その所属する語をあげれば、次のようになる。

D●○○○○

c 言ひ送り 言ひ散し 植え並べ 押し浮べ 押し殺し 押し止め 押し並べ 押し握り 押し回し 押し渡り 聞き伝へ 汲み下し 突き並べ 告げ知し 引き違へ 引き外し 引き結び 踏み鳴し 遣り損じ 遣り止め 行き向ひ 呼び上せ 沸き上り

（23語）

d 押し移り 押し下し 押し流し 押し拭ひ 押し量り 押し破り 追ひ出し 追ひ下し 追っ掛り 追っ返し 追っ放ち 聞き出し 突き落し 突き倒し 抜き出し 乗り走り 引き出し 引き落し 引き隠し 引き被き 引き求め 引っ返し 踏み含み 舞ひ奏で 焼き払ひ 瘦せ黒み 行き通り 呼び出し 呼び返し 寄り掛り 割り合せ

（31語）

Dの類は、cが前項●●に後項●●が連接した場合、dが前

項●●に後項●●が連接した場合の語を集めてある。いずれも①Aと同様に、前項のアクセントを生かして、後項は低く平らに付いている。d「引き隠し」の後項「隠す」は、古く●●○○型の例もあるが、のち二類動詞と合流するようであるから、dに含める。

E(1)●●●○○(2)○○●●●

相ひ当り 出で浮び 出で向ひ 打ち上り 打ち送り 打ち囲み 打ち続き 打ち止め 打ち鳴し 打ち並べ 打ち上し 打ち上り 打ち潜め 打ち回り 打ち迎へ 打ち向ひ 落ち下り 下り降り 掻き鳴し 掛け並べ 切り回し 漕ぎ来り 差し当り 刺し殺し 刺し違へ 差し上し 住み荒し 攻め下り 攻め上り 立ち上り 立ち来り 立ち並び 堪へ 忍び 付け並べ 照り渡り 取り伝へ 取り止め 取り忘れ 成し下し 成り上り 馴れ遊び 逃げ上り 馳せ後れ 馳せ来り 馳せ下り 馳せ並べ 馳せ上り 馳せ回り 這ひ回り 伏し転び 待ち明し 召し使ひ 洩れ聞え 攀ち上り

（54語）

Eの類は、前項○○●●に後項●●●●が連接した場合である。①Bと同様に（1）○○●●●●、（2）○○●●●●両様が見られるはずであるが、（1）のはうは「出で向ひ・立ち来り」の二語しかなく、いずれも促音便の例である。

出向ってこそ（中上上上上中中） 8上少将一六3指声
立来って（×上上上上×） 2上禰 七3白声

それ以外はみな《口説》も《白声》も(2)のアクセントをとる。ただ右の《白声》の例は、古いかたたちが新しいアクセントを反映する曲節にあらわれていて、いささか問題である。そこで『尾崎本』などの「正節」譜と比べたところ、これらはみな(2)にあたる譜記が施されていた。ひとり『京大本』の書入れに「都本」として『東大本』のような譜記が指示されてあったにすぎない。そうすると(1)のアクセントは《指声》の1例だけとなつて、平曲譜本では(2)ばかりと言つてもよいくらいになる。このことは、①Bにおいて(1)から(2)への変化が江戸時代も安永の頃に完了しようとしていたと推定したのに比較して、②Eのほうが、いくらか早く進行したのではないかという印象を与える。

F (1) ●●●○○ (2) ○●●○○

相ひ構へ 生き返り 生き残り 打ち落し 打ち被き 打ち砕き 打ち静め 打ち叩き 打ち通り 打ち嘆き 打ち払ひ 打ち紛れ 討ち洩し 打ち破り 打ち別れ 掻き合せ 掻き出し 掻き口説き 掻き曇り 書き流し 駆け破り 刈り収め 漕ぎ出し 漕ぎ通り 差し出し 差し集ひ さしほだり 剃り下し 立ち返り 取り集め 取り出し 取り落し 取り覆ひ 取り返し 取り直し 投げ返し 成し設け 逃げ籠り 掃き拭ひ 馳せ参じ 這ひ掛り 吹き覆ひ 吹き迷ひ 伏し拝み 据り起し 召し集め 召し出し 召し返し

(48 語)

Fの類は、前項○○●●(○○●●)と後項●●○○の連接した場合で、やはり(1)(2)の両様のアクセントがあらわれるが、ここでは(1)は《口説》に、(2)は《白声》にのみあり、はっきりと対立している。《指声》も「差し集ひ・伏し拝み」の二語にみられるが、もちろん(1)を反映する。ここで、さきに述べた①Bや②Eと比べてみると、②Fはさらに複合の進行が遅かったと考えることができる。全体としては、E B Fの順に複合が進んだらしい。

このなかの「書き流し」は完了辞「り」に接続する已然形のアクセント○○●●●●から推定した。「流す」のような二類動詞は、このような場合●●●●となり、ほかの場合は連用形も已然形も●●●●となる。⁽¹⁵⁾

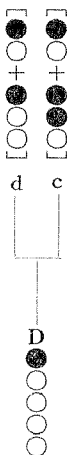
②ではDEFのほかに、次のようなアクセントもみられた。
G ●●●○○

馳せ参じ 召し請じ 出で来り^{きた}

(3 語)

Gの類は、前項○○●●(○○●●)に低起式(○○●●など)の後項が連接した場合のアクセントとみられるが、「来る」は高起式であるから、「出で来り」は例外となる。

以上②「二拍十三拍」の様子を图示すれば、左のようである。



○●●(○●●)+●●●——E(1)○●●●○

○●●(○●●)+●●●——F(1)○●●●○

○●●(○●●)+●●●——G○●●●○

ところで、②でありながらDとGに属さないものが一語ある。
「立て籠り」がそれで、つぎのようにでてくる。

立て籠り、(上上上××)

榎籠って(上上上××)

どちらの例も「籠・籠」の右肩に濁点があり、連濁している。

さて、この語が近世において複合したのなら、○●●(○●●)

+●●○○」によってF(1)○●●●○または(2)○●●●○

のアクセントになりそうなものであるが、そうはなっていない。

おそらくこれも「飽き足り・討っ取り」などと同様に、古代語の

段階で複合していたものと思われる。とすれば、前項が低起式で

あるから、二類型五拍動詞の一般型○○○○●○となり、さらに変

化して、連用形ながらここにみられる●●●○○○になったのであ

ろう。

四

最後に③「三拍十二拍」の連接の場合をまとめてみる。ここにあらわれるアクセントは、H●●○○○、I●○○○○、J○○●

○○○の三種類である。説明は省略して、まず語例と図のみを掲

げる。

H●●○○○

e 替り行き 転び入り 止め置き 名乗り捨て 上り越え

(5語)

f 送り付け 聞し召し 下り着き 転び合ひ 転び出で 進

み出で 上り着き 磨き立て 迎へ取り

(9語)

I●○○○○○

g 預け置き 抱き上げ 痛め問ひ 移し遣り 落し据ゑ 思

ひ置き 思ひ知り 下し置き 婦り入り 婦り去り 尋ね問

ひ 尋ね行き 作り替へ 憎み初め 残し置き 走り散り

走り寄り 申し上げ 申し入れ 申し置き 申し替へ 紛れ

入り 迷ひ行き 乱れ入り

(24語)

h 奪ひ取り 起り合ひ 生し立て 思ひ出で 思ひ切り 思

ひ立ち 思ひ成し 思ひ成り 思ひ分き 泳ぎ着き 隠し兼

ね 搦め捕り 騒ぎ合ひ 縛り着け 尋ね兼ね 頼み切り

倒れ伏し 掴み合ひ 掴み付き 疲れ果て 嘆き合ひ 走り

出で 申し受け 紛れ出で 乱れ合ひ 求め兼ね 寝れ果て

別れ果て

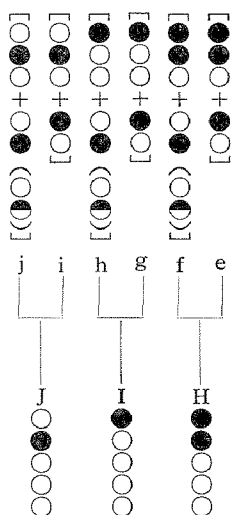
J○○○○○

i 罷り入り

(28語)

(1語)
j 思し召し 罷り出で 罷り過ぎ 罷り立ち 罷り成り 参り会ひ 参り着き

(7語)



ここに問題となるのは「作り籠め」に●●●●●●のような譜記があることである。「作る」は近世●●●●●●であろうから、当然I●●●●●●となつてしかるべきである。しかしこれも、ほかの「正節」譜をみると、『東大本』の誤記と考えられる。
ほかには、「返し入れ」に○○○○●●○○(《口説》《白声》とも)を思わせる譜記が付けられているのが例外となるばかりである。

五

近世における、いわゆる複合動詞のアクセントは、右にみたとおりである。それでは中世後期、室町時代はどうであったろうか。そこで室町初期のアクセントを反映する可能性のある『補忘

記』についてみると、次のようである。⁽¹⁷⁾

① (二拍十二拍) 「差し置く」(角徴徴角) 、連用形は○●●○となりうから、近世のB(1)と同じになり、前後項のアクセント構成も一致する。

② (三拍十三拍) 「請ひ願ふ」(差し隠す) (角徴徴角) は近世のF(1)に、構成上も一致する。「隠す」は『補忘記』では(角徴徴) 、すなわち○●●●●●(終止・連体形)のアクセントであるが、平曲譜本では二類型●○○と合流しているのので、ここでも「隠す」に●○○型もあったとみたい。

③ (三拍十二拍) 「拾ひ取る」(角徴角角) 、「思い遣る」(角角角角) は、それぞれ近世のH・Iに、構成上も一致する。

いわゆる複合動詞の例を、この時代のアクセント資料から多く集めるのは無理であるが、平曲の《指声》などをも勘案してみるに、およそは近世の状況と変わらないように思える。

そうしてみると、体系変化後に二語の動詞が複合の方向に向かう場合には、ここにみたようなA~Jのパターンにしたがったのではないかと考えられる。特に強い複合意識が生ずれば、一足飛びに終止・連体形●●●●●●(●●●●●●)や●●●●●●(●●●●●●)のような一語動詞の安定型にならないことはないであろうが、平曲譜本において、これだけ多くの語がA~Jのパターンに属し、例外となるものが少ないことからしても、この推定は成り立

つと思う。また一部狭義の複合動詞になっていると思われるもの
〔飽^だき足る・討^うつ取る・打^うつ立つ四段・下二・踏^はん張る・立^たて籠^{こも}る〕も、平曲の詞章の一部であるわけだから、語形そのものは
古代語においても存在していたし、さらに狭義の複合動詞として
相応しい外形（連濁・音便など）をそなえているので、まず間違
いなく体系変化以前からの複合動詞と言えるのではないか。そう
であるとすれば、体系変化以前の平安・鎌倉時代における狭義の
複合動詞の例を、わずかながら増補できたことになる。

ところで、平曲譜本のA-Jのアクセントは、はたして一語の
アクセントとみなしてよいものであるうか。狭義の複合であるな
らば、一語動詞のそれと同じになるはずであるが、そのような例
は、江戸時代中期（十八世紀後半）においてさえ極めて少ない。こ
のA-Jは、前項と後項が連接して、弱く複合したもの（前項後
項それぞれのアクセントを生かしながら、アクセントの高い部分
が二箇所にならない程度に調整されたもの）とみるのが妥当であ
ろう。たとえば、古く「が・に・を」などの一般の助詞は卓立型
から従属型に変化したのが、従属型になったからといって一語にな
ったとは言わない。これもそれと同様で、一語と言うには複合が
弱く、完全に二語とみるのもためらわれる。あえて言うならば一
文節ということになるうか。このような弱い複合が、体系変化以
後頻繁にあらわれていたことは、本稿にみてきたところから明ら
かである。それは、前項後項のそれぞれの動詞が単独でも使われ
るという複合動詞の性格上、ときには解体可能な臨時的複合であ

ったものと思われる。そして、このような事情は、体系変化以前、
少なくとも鎌倉時代末頃では基本的に同じではなかったかと考え
る。この時代のアクセント資料に、そのような形跡がみえないの
は、それが臨時的なものであったからで、規範性の強い資料には
あらわれなかったものと解釈する。

ここに古代語の複合動詞を一語とみるか否かの問題も、自ずと
解けてくるのであって、完全な複合をもってはじめて一語とする
のであれば、古代語の複合動詞を二語とみる立場も支持しうるも
のであるし、規範意識としてはおそらく二語であったのであろ
う。また、関氏のいわゆる「真の複合動詞」に完全に複合したア
クセントが形成されていたかとなると、否定的にならざるをえな
い。思うに、「意味の癒着」を問題にするかぎりでは、ここにい
う弱い複合アクセントの段階で十分なのであるうし、南芳公氏の
いわゆる「連合」⁽¹⁹⁾も、アクセントの面では、これをいうのではな
かるうか。

ここに思い合わされるのは、小松氏が注意された、左の例であ
る。⁽²⁰⁾

擲倒 カヘリウツ〈平平平上上〉

観智院本類聚名義抄 仏下本30ウ1

省 カヘリミル〈平平平上上〉

高山寺本三寶類字集 88才2

小松氏は、これについて「(アクセントが)再調整されるまで
の過渡的段階を表わしている」と見るべきかもしれない」と慎重に

述べられたが、もし再調整されるのであれば、これらの語は○○○●○という低起式の一般型に落ち着くことになったであろうし、体系変化後は●●●○○○のようなかたちになるはずである。ところが平曲譜本では、

顧みて(上××××)

10下六八二口説

かへりみず(上××××)

11上妓王 一四口説

などとあって、むしろ近世のアクセントを反映していると考えられる。すなわち、古代語においては、「かえりみる」は一語に複合する道をたどらずに、臨時的な、弱い複合のままでアクセントの体系変化をむかえたのである。そして、前項後項二つの動詞はそれぞれに変化して、また新しいかたちで連接し、弱い複合を形成することになった。それが右の例だと考えられるのである。

また、金田一氏が鎌倉時代に○○○○(もてなす)や○○●○(「差し置く・生け捕る」)のかたちを認められ、秋永氏が後者に「掻き鳴す」の例を加えられたのも、ここにいう弱い複合の例であると思うが、いかがであろう。

このように、古代語においても、近世と同様な様相を想定することは可能であるが、いかなせん用例に乏しく憶測の域を出ない。

注(1) 吉澤(一九五二)、金田一(一九五三)、桜井(一九六〇)

(2) 大野(一九五六)、閑(一九七七)(一九八七)

(3) こまつ(一九七五)

(4) 小松(一九七七)

(5) 山口(一九八二)

(6) 金田一(一九七六)

(7) 金田一(一九五九)や(一九七四)18頁など。奥村(一九八一)340/526頁などでは金田一説に対し、実際にはそれほどはつきりした差はないと否定的見解をとる。

(8) 二語のアクセントの例も少なくない。たとえば「思し召し」では、二語としてみられるものが48例(《折声》1《口説》29《白声》18)、「弱い複合」とみられるものが72例(《指声》1《口説》55《白声》16)ある。同様に「聞し召し」では、それぞれ6例(《口説》3《白声》3)、21例(《口説》12《白声》9)となる。

(9) B(1)○○●●は単なる二語の連接か、それとも後述する「弱い複合」か、という問題がある。もし前者であれば、[○○●○○●+○○]の場合のみ「弱い複合」をする時期が遅かったことになり、ACCの場合に比べて不均衡である。B(1)は確かに前後項のアクセントをそのまま連接したかたちではあるが、高い部分が一つにまとまっていることから、そのままでも「弱い複合」になりえたものと解する。ただしBEFにおいて(1)から(2)に変化したからといって、複合の度合は進んでも「弱い複合」の域を出なかったものと考ええる。

(10) 平家正節刊行会編『平家正節』上下巻(一九七四 大学堂書店)、京都大学文学部国語学国文学研究室編『平曲正節』一〜三(一九七一 臨川書店) 秋永一枝・梶原正昭編『前田流譜本平家物語』一〜四(一九八四〜一九八五 早稲田大学出版部)

(11) 「住み馴れ」について3例中2例まで過去辞「シ」に続くものであるが、奥村(一九八一) 383頁によれば二拍二段式動詞第二類は、氏のいわゆる㊦形●○が「シ」に続くから、この場合は例外でなくなる。

(12) 金田一(一九六四) 395頁

(13) 奥村(一九八一) 376、378頁

(14) 金田一(一九六四) 375頁、奥村(一九八一) 271頁、桜井(一九八四) 217/660/854/1054/1254頁、秋永(一九八九) 75頁

(15) 奥村(一九八一) 390頁

(16) 馬淵(一九五八)

(17) 金井(一九八八)

(18) 関(一九七七) 第一章第二節

(19) 南(一九八八)

(20) いずれも『天理図書館善本叢書』に拠る。

(21) 金田一(一九六四) 396/397頁

(22) 秋永(一九八九)

〔参考文献〕

秋永 一枝(一九八九)「古今集声点本における多拍語動詞のアクセント―古今集動詞のアクセント 承前―」

『国文学研究』98)

大野 晋(一九五六)「基本語彙に関する二三の研究―日本古典文学作品に於ける―」(『国語学』24)

奥村 三雄(一九八一)『平曲譜本の研究』(桜楓社)

金井 英雄(一九八八)『補志記 語彙篇 博士付和語索引』(アクセント史資料研究会)

金田一春彦(一九五三)「国語アクセント史の研究が何に役立つ

か」(『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂)

(一九五九)「平曲の音声」下(『音声学会々報』101)

(一九六四)『四座講式の研究』(三省堂)

(一九七四)『国語アクセントの史的研究 原理と方法』(塙書房)

(一九七六)「連濁の解」(『Sophia Linguistica』II)

こまつひでお(一九七五)「音便機能考」(『国語学』101)

小松 英雄(一九七七)「アクセントの変遷」(『音韻(岩波講座

日本語5)』岩波書店)

桜井 茂治(一九六〇)「平安・院政時代における「複合動詞」

―関一雄氏の論文を読んで―」(『国語と国文学』37-10)

(一九八四)『中世京都アクセントの史的研究』(桜楓社)

関 一雄(一九七七)『国語複合動詞の研究』(笠間書院)

(一九八七)「複合動詞―平安仮名文学用語として―」(『古典解釈と文法―活用語(国文法講座2)』明治書院)

馬淵 和夫(一九五八)「国語の音韻の変遷」(『音声の理論と教育(国語教育のための国語講座2)』朝倉書店)

南 芳公(一九八八)「いわゆる複合動詞の後項「ワタル」について」(『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』桜楓社)

山口 佳紀(一九八二)「語形・語講成」(『語彙原論(講座日本語の語彙1)』明治書院)

吉澤 典男(一九五二)「複合動詞について」(『日本文学論究』10)